

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 27 日現在

機関番号：13103

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2010～2013

課題番号：22730388

研究課題名(和文) 授業実践の相互行為における学習経験・教授知識の解明

研究課題名(英文) Studies on learning experiences and instructed knowledge organized through classroom interaction

研究代表者

五十嵐 素子 (IGARASHI, Motoko)

上越教育大学・学校教育研究科(研究院)・准教授

研究者番号：70413292

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,500,000円、(間接経費) 450,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、社会学のエスノメソドロジーの方法論に基づき、授業の学習経験や教授知識を授業の相互行為上で組織化されるものとして分析した。特に、本研究が明らかにしたのは、(1)学習経験や教授知識が、教師と生徒の相互行為を通じてどのように組織化されているのか、(2)学級に共有された独自の慣習や人間関係、環境としての教具・メディアといった諸資源が、教育実践においてどのような意味や効果を持つものとなっているのか、(3)授業づくりの困難を改善するため、その学習活動の設計において有効となる見方や観点、の3点である。

研究成果の概要(英文)： From the perspective of the ethnomethodological approach, this project examined learning experiences and instructed knowledge organized through classroom interaction. We clarify three issues: (1) how learning experiences are organized through the interaction between the teacher and the students; (2) how environmental resources shared in the classroom (e.g., longstanding practices, relations between students, media communication tools, etc.) can affect educational interaction; and (3) ideas or viewpoints that work well to improve lesson plans in terms of the design of learning activities.

研究分野：社会学

科研費の分科・細目：社会学・社会学

キーワード：エスノメソドロジー 学習経験 教授知識 相互行為

### 1. 研究開始当初の背景

この10数年の間、教育学においては、伝達型の授業観・知識観からの転換が提唱され、その必要性が認識されてきた。またこうした転換に寄与するものとして、省察のための質的な授業研究法が提案されていた。

具体的には、認知科学における上野直樹(1999)『仕事の中の学習』の状況論的アプローチや、発達心理学における秋田喜代美(2007)『授業分析と談話分析』などである。また、教育社会学の分野でも、H.Mehan(1979)“Learning Lessons”などのエスノメソドロジの知見を踏まえ、北澤毅ら(2009)が、社会化過程を明らかにすることを目的に授業規範としての相互行為のあり方の研究を進めている。また、教科教育の分野でも「臨床教科教育学会」が立ち上がるなど、教育実践の臨床的研究の必要性が認識されつつあった。

こうしたなか、代表者は教員養成系大学において、実践力の向上のために、省察を促す授業の研究方法について、研究・教育を行っていた。代表者は、社会学のエスノメソドロジの知見を踏まえ、これまで認知科学・心理学の対象となってきた、教育実践に関わる心的現象(知識、学習、理解、記憶など)を社会的な現象として扱う立場をとってきた。そしてこれまでに、「教授知識」や「学習経験」に関わる現象を、個人化されたものではなく、相互行為上で表出され、他者からの評価基準を含んだ形で意味づけられるものと捉える研究視角を提示してきた。

こうした研究の成果から見ると、これまでの教育実践の質的な研究群の多くは、学習活動の流れや会話・相互行為の特徴に着目しているが、それらと学習経験・教授知識との内在的関わりを論じる視点を持っていないように思われた。それゆえ、これまでの研究成果をさらに発展させて、学習経験や教授知識の質を実践内在的に捉え、教育実践の設計を評価することができる、授業研究の方法論と分析手法を確立する必要があると考えた。そうすることで、教育実践における教師の関わり方の教育上の意義を明らかにし、教育実践の困難さを学習活動や相互行為の設計の観点からとらえることができると考えた。

### 2. 研究の目的

本研究は、社会学のエスノメソドロジの方法論に基づき、授業の学習経験や教授知識を授業の相互行為上で組織化されるものとして分析する。その際に、教育実践の設計(デザイン)に関わる相互行為上の諸資源(学級に共有された独自の慣習や人間関係、環境としての教具・メディアを含む)がどのようなものであるのかについて明らかにし、それらが教育実践の設計と実施にどのように関わっており、授業づくりの困難性がどこにあるのか、その改善の可能性を明らかにする。これらの作業を通じて、社会学の相互行為分析

の方法論を授業研究の方法論として洗練させ、その有効性を広く示していく。

特に、本研究で明らかにするのは、相互に関係のある、(1)様々な学習活動における、学習経験・教授知識の組織化のあり方、(2)学級に共有された独自の慣習や人間関係、環境としての教具・メディアといった諸資源が、教育実践においてどのような意味や効果を持つものとなっているのか、(3)授業づくりの困難を改善するために、その学習活動の設計において有効となる見方や観点、の3つである。

### 3. 研究の方法

(1)まず学習活動の多様性を概観するため、学習者同士の交流や多様な形態の学習活動を含んだ教育実践のビデオデータや音声データの収集・整理を行なった(22年度、23年度)。さらに学級に共有された慣習や人間関係について概観するため、特定の学級に焦点をあてて、縦断的なフィールド調査を行って、継続的にビデオデータを収集することを行なった(24年度)。それぞれの調査では、授業者と相互討議やインタビュー、児童生徒へのアンケート調査等を通じて、実践の設計についての理解を深めるよう心掛けた。

具体的には、平成22年度において、自然と触れあう体験的学習活動(7~8月)、学校間の交流を含む博物館における体験学習活動(10月)、研究連携している小・中学校における学習者の主体性を重視した様々な形態の学習活動のビデオデータを収集した(5月~7月、10~11月不定期)。

23年度においては、外国語活動における海外との遠隔コミュニケーションの実践(5月、6月)、遊びやゲーム活動を取り入れて探求的な思考を促す理科の実践(6月)、英語劇の創作や実演によるアウトプットを組み込んだ英語科の実践(12~3月)、一斉授業の参加の素地を形成するための幼稚園の実践(3月)のデータの収集・整理した。また遊びやゲーム活動を取り入れた実践の分析を行い、授業者と相互討議を通じて、実践の設計についての理解を深めることができた(3月)。

24年度には複数の学級を対象として継続的なフィールドワークを行い、ビデオデータを収集した(4~6月、7月、11~1月)、また随時に授業者に聞き取り等を行い、実践の理解につとめた。

(2)これらの録画・録音データを収集した後にはそれらのデータを動画ソフトで整理・電子データ化し、個人情報等を排除し転記して相互行為分析のためのスクリプトデータを作成した。

(3)上記の作業と並行し、収集したデータの分析の作業を進めていった。ビデオデータを非公開で検討する研究会で、随時にデータセッションを行ない、知見を洗練させるよう、

研究会で分析の検討を行った。

#### 4. 研究成果

(1) 様々な学習活動における、学習経験・教授知識の組織化のあり方についての成果は、以下である。

保育実践において保育者が保育実践上での望ましさの規範に照らして子どもの経験を意味づけていること、またそうした判断が子どもとのやりとりにおいて遂行的に示されることで、子どもの振る舞いにおける社会化が促されていることを、具体的な事例から明らかにした(2011年)。

また教師が方法的な知識を児童に教える際には、その知識を学習したとみなせる基準を、児童の環境や身体を利用しながら相互行為上で示していたこと、またそうした基準をそのように示したことで、生徒自らが学習経験を組織化することも可能であったということ、具体的な事例を通じて明らかにした(2013年、2013 IEMCA Conference)。

(2) 学級に共有された独自の慣習等の諸資源が、教育実践においてどのような意味や効果を持つのかという点についての研究成果は以下である。

先行研究では「IRE連鎖」という授業会話の構造が指摘されてきたが、教師がこうした連鎖を筋道の通った「公的な授業会話」として維持していくための作業があることを指摘し、その作業において教師が生徒の発言を選別し、意味づけているのかについて明らかにした(2013年、第32回社会言語科学学会研究大会)。

また、こうした授業独特の会話に児童・生徒が積極的に参加できるためには、ある程度その会話の進行が予測可能でなければならない。この予測可能性がどのように授業の文脈や教師の発言の仕方によって支えられているのか、そのことによってどのように生徒が授業会話に参加できているのか、について明らかにした(2013年、第86回日本社会学会大会)。

さらに、教師が授業のねらいとした児童生徒の参加の仕方を達成するために、教師がどのように教具を用いながら、授業の会話の進め方を設計していたのか等について考察した(2012年、第85回日本社会学会大会)。

(3) 教師の授業づくりの困難さを改善するためにその学習活動の設計において有効である見方や観点に関する研究成果としては、以下である。

実践を省察する道具として授業ビデオデータを用いる方法として、授業のビデオデータにおける教師の行為の仕方を、授業者の判断基準が反映されているものとみなすとす

る知見を具体的に提案した(2010年)。

また、学習活動を設計する際に有用な視点として学習活動の主体と行為役割の配分に

着目するべきであるという知見を、エスノメソドロジーの立場から示した(2012年)。

さらにこうした知見をもとに、ICTを活用した協働学習の実践事例において、教師が学習活動のなかにどのように教具やメディア等の資源の配置をしていたのか、また生徒間にどのように行為役割の配分をしていたのか、その結果としてどのような生徒の学習活動が可能になったのかという点について明らかにした(2013年、2013年社会情報学会学会大会)。

#### 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計2件)

五十嵐素子、学習活動をデザインするための視点：エスノメソドロジー研究の立場から、教育創造、査読無、170巻、2012、48-53。

<http://repository.lib.juen.ac.jp/dspace/bitstream/10513/1934/3/%E6%95%99%E8%82%B2%E5%89%B5%E9%80%A0-170.pdf>

五十嵐素子、保育実践における子どもの感情経験の取り扱い：エスノメソドロジーの視点から、子ども社会研究、査読有、第17号、2011、5-11。

〔学会発表〕(計7件)

五十嵐素子・平本毅、授業場面における“IRE”連鎖開始部の認識可能性について、第86回日本社会学会大会、慶応大学三田キャンパス、2013年10月12日

五十嵐素子、藤岡達也、授業実践の省察から捉える教師の専門性：ビデオデータを活用した相互行為分析の知見から、平成25年度日本教育大学協会研究集会、札幌全日空ホテル、2013年10月5日

五十嵐素子・笠木祐美、教育実践におけるメディア利用のデザイン：ICTを活用した協働的な学びの事例から、2013年社会情報学会学会大会、早稲田大学早稲田キャンパス、2013年9月15日

平本毅・五十嵐素子、授業の相互行為秩序と「公的」な発言の構成、第32回社会言語科学学会研究大会、信州大学松本キャンパス、2013年9月8日

五十嵐素子、Account of action as learned: Embodied criteria in an action organization、2013 IEMCA Conference、Wilfrid Laurier University、Canada、2013年8月6日

五十嵐素子、授業実践における教師の課題解決と判断基準：教員研修における研究授業の事例から、第85回日本社会学会大会、札幌学院大学、2012年11月4日

五十嵐素子、現場の知識を生かす授業ビデオデータの利用法、平成21年度第4回日本科学教育学会研究会、上越教育大学、2010年5月29日

〔図書〕(計1件)

五十嵐素子、教員研修や教員養成の授業  
観察・分析における「授業ビデオデータ」  
の利用法、『環境教育と総合学習』(藤岡  
達也編、協同出版) 2011、60-69

6. 研究組織

(1) 研究代表者

五十嵐 素子 (IGARASHI, Motoko)

上越教育大学・大学院学校教育研究科・准教授

研究者番号：70413292